

# आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学・京都文教短期大学図書館  
京都府宇治市槇島町千足80

## ❖ 『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？これからの経済と女性の話』 ❖

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長  
総合社会学部・教授(植民地主義、帝国研究) 遠藤 央

今話題の本で、書評がたくさん書かれている。帯によれば「世界20か国語で翻訳」とある。プロローグにはつぎのような文章がある。「本書が描きたいのは、誘惑の話だ。ある経済学の見方が私たちを狡猾に言いくるめた話だ。それはどうやって私たちの皮膚にもぐりこみ、ほかの価値観を制圧し、世界経済にとどまらず私たちの日常をも支配するようになったのだろうか。それは男と女についての話だ」。

第一章が題名通りの「アダム・スミスの食事を作ったのは誰か」である。もちろん、国富論を書いたあの人である。著者はいう。「「見えざる手」ほど有名な経済学用語もないだろう。アダム・スミスがこの言葉をつくり、のちの経済学者がそれを広めた。見えざる手は名前のとおり見ることもふれることもできないけれど、すべてを導き、整え、正しい方向に進ませしてくれる。それは上から支配するのでもなければ外から干渉するのでもない。指図も邪魔もしない。それは個人の行動や選択のあいだに立ち現れ、システムを内側から動かす力である。『国富論』のなかで見えざる手という言葉が使われたのは一カ所だけだ。しかし現在では、それがあたかも経済学の礎であり、経済学の宇宙そのものであるかのように語られる」。

中公文庫で読める翻訳の『国富論』は分厚い三巻本であるが、第二巻、第四編第二章「国内でも生産できる財貨を外国から輸入することにたいする制限について」のなかに見えざる手(an invisible hand)がでてくる。小見出しには「個

人の利益を目指す投資が、見えざる手に導かれて、社会の利益を促進する」とある。「各個人は、かれの資本を自国内の勤労活動の維持に使い、かつその勤労活動をば、生産物が最大の価値をもつような方向にもってゆこうとできるだけ努力するから、だれもが必然的に、社会の年々の収入をできるだけ大きくしようと骨を折ることになるわけである。もちろん、かれは、普通、社会公共の利益を増進しようなどと意図しているわけでもないし、…自分自身の利得のためなのである。だが、こうすることによって、かれは、他の多くの場合と同じく、この場合にも、見えざる手に導かれて自分では意図していなかった一目的を促進することになる」という箇所である。ここにはかなり長い註がついており、「要するに「見えざる手」は、経済理論の整序性を補完するための切り札だったと言える」と書かれている。

「かれは」とあるように、利益を得る労働を担当するのが男性であるという前提を、著者は問題にしている。つまり、アダム・スミスの食事を作る無償労働(支払われない仕事)をしているのは誰で(かれは独身なので母親だった)、なぜ無償なのか、ということである。たいへん読みやすいので、授業で紹介するつもりである。

『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？ これからの経済と女性の話』

カトリーン・マルサル著(高橋璃子訳) / 河出書房新社(2021.11)

(えんどう ひさし)

## 絵本「ぼく」にこころを打たれた

非常勤講師（元こども教育学部・教授（児童福祉、発達心理学、臨床心理学）） 柴田 長 生

70歳、本が読めなくなってきた。軽度の近視と乱視に老眼が重なり、文庫本などはどのようにしても読めない。老眼鏡やルーペも辛く、読もうとする気力や意欲も失せてきている。我ながら情けない。それでも読む場合は、「ある部分のみを読む」ことが大半になり、1冊の本を読み通すことがなくなった。

そんな私に、この原稿依頼が来た。「引き受けたものの、何を書こうか」と思い悩んでいる時に、90歳の谷川俊太郎が、子どもの自死をめぐる絵本を制作したというNHK・ETVのドキュメント番組（ぼくは しんだ じぶんで しんだ 谷川俊太郎と死の絵本）に出会った。出版者の依頼でまず谷川俊太郎がテキストを書き、その後作画を委嘱された若きイラストレーター合田里美と谷川との間の長い共同推敲の後に、1冊の絵本が生まれ出される制作過程を扱ったドキュメント番組であった。

谷川のテキストは、実際の自死案件に基づくものではなく、90歳の詩人が受け止めた「子どもの自死」について、詩人のこころから紡ぎ出されたようなテキストであった。それだけに、こんなものが絵として表現できるのかと思ったが、合田はそれらの心象風景とでも言える世界を、1枚ずつのスケッチに落とし込んでいく。その後の数度に及ぶ両者の意見交換（主には谷川からの新しいイメージに基づく、作画への意見）によって、1冊の絵本ストーリーの中に「主人公＝ぼく」が住まわっていた風景が構成されていく。その間の変化は、透明度の曖昧な水面が、少しずつ澄み渡り、光と影を伴った限りなく透明で静かな水中世界が見えてくる様な感じであった。この間の2人のやりとりがすごかった。

子どもの自死については、昔「ぼくは12歳」（岡真史著）という本を読んだ記憶がある。ここに書かれている詩は、本人が遺したものであり、そのリアリティを挟んで、こちらにはある種の受け入れがたい感情と共に、とても透明でとがったもの

との交点（接点）を私の中に強く刻むといった感じであった。

テレビを見た後、すぐにこの絵本を購入した。手に取り、表紙画から順にゆっくりと読んで（というかこの絵本の世界を訪ねて）いくと、この絵本は岡真史の世界で触れた感じとは全く異なっていた。むしろユーミンの「ひこうき雲」を聴いた感じと近いかも知れないが、ユーミンの曲に想う叙情の部分が、この本ではほとんど立ち上がってこない。

絵本を読んでいる時間は、テレビを見た時の印象とは大きく異なった。読み進めていくのだが、この絵本には時間進行がほとんどない。そして、各画面における「ぼく」の心象世界を、描かれている風景が包み込み、その風景の中の登場人物としての「ぼく」は曖昧なのに、しかしそこに確かに存在する「ぼく」の心象世界に共鳴するように、自分が（というか、自分の中の、あるイメージを伴った自分、あるいは子どもの頃の私イメージが）溶け出して行くような感覚をおぼえた。そして、ここでの「死の世界」は、葬儀その他で感じる生々しく、ある種恐ろしい死のイメージなどは全く異なる、「怖くない世界」であった。こんな感じは、テレビ番組からは味わえない。特に絵が秀逸である。

この本には、「死なないでください」という編集者の「あとがき」が添えられている。絵本を読み終わって、その後でこのあとがきを読むことで、現実の自分自身の世界に戻れるような、自分自身のリアリティに関する不思議な感覚も味わった。

本を通して、短い時間の間に、自分のこころが深く動くようなことは、久しぶりの体験であった。文字と絵とがひとつに重なる「絵本」の世界には、限らない豊かなものが含まれているのだろう。

（しばた ちょうせい）

## 🌀🌀 読書という不思議な海原 🌀🌀

元ライフデザイン学科・教授（日本語学、コミュニケーション学） 森川知史

図書館の開架書架の前に立って、本の膨大な海原の広がり进行うことがある。ここには時間と空間（人類5000年の歴史と世界中のあらゆる場所）を越えて書き記された、知識と思いの集積の茫洋たる海原がある。

メソポタミアで粘土に、古代エジプトでパピルスに、ペルガモンで獣の皮に、インドやスリランカで木の葉に、中国で骨や甲羅に、そして木・竹・絹に記されてきた。中でも和紙に墨で書かれたものは千年を越えて残された。そして、ゲーテンベルクの活版印刷術が今日の世界の蔵書の蓄積を基礎づけた。今では、タブレット端末に無限の本を呼び込んで読むことさえできる。

本を開くと未知の世界の扉が開く。見たことも聞いたこともない世界が広がり、多くの知識や知恵やものの見方や感じ方・考え方の新たな扉を開いてくれる。現実世界の再確認・再認識ができることもあれば、ファンタジーや空想の非現実空間へ連れて行ってもくれる。

「よむ」は「詠む」とも書かれるように、宮中の歌会始のように声にして詠み上げることであり、作歌作業そのものが「詠む行為」でもある。歌に喚起力があることに誰もが気付くが、それはメロディーの力以前にことばそのものが内在する音調に備わっているもので、声に出して響かせればより強く人の内部に届くものだ。宗教に呪文のような何らかの唱え言や聖歌が付きものなのは、人の内部深くに届くこの喚起力を必要としているからだろう。

一方で「ことば」は概念として意味や価値を伝え、科学的記述や論文のような論理的理解を促す力も持っている。これら詩的表現から哲学的・数理的記述までの大きな広がりの中に、あらゆる書物は存在している。

毎日が順調なときに本を楽しむことはできても、強く内部に響く力を持たないように感じる。問題を抱えたときにこそ、その中の表現や考えが特別に響くことが多いのではないか。

ディオゲネス・ラエルティオス著『ギリシア哲学者列伝』には、「教養は、順境にあつては飾りであり、逆境にあつては避難所である」というアリストテレスの言葉が書き留められている。アリストテレスと言えば『形而上学』冒頭の一文「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」が有名だが、私たちは知らずにはられない。今現在の自分の興味に触れることも、通り過ぎた過去のこと、明日のこと、将来のこと。その意味を問い、考えて納得したい。私たちの知りたいことに終わりはない。

だが、知ろうとする人がみんな本を手にするわけではないだろう。『村上さんのところ』というエッセイの中で村上春樹は一読者の質問「本をよく読む人と、本をほとんど読まない人がいますが、どちらの人生が幸せでしょうか？ 全般的に本を読まない人のほうが、楽天的で人生を楽しんでいるように感じますが、どう思われますか？」に、こう答えている。「たとえ不幸せになつたって、人に嫌われたって、本を読まないよりは本を読む人生の方がずっと良いです。そんなの当たり前の話ではないですか」と。端的な回答だ。

「言葉には明確に外がある」とあとがきに書く作家保坂和志の『言葉の外へ』には「読書とは第一に〈読んでいる精神の駆動そのもの〉のことであつて情報の蓄積や検索ではない」とある。読書から何が得られるか、と問うことの野暮さに気付かされる。

本は読者を異空間へと連れ出してくれる。現実世界で巡り逢ふことの叶わない人や世界と出会つたり、未知の冒険に連れ出してくれる。本の中ならどんな音も光も描き出せるし、人知を越えた世界をも夢想できる。読者は自分だけの発見をするし、自分だけの地図が大きく広がって行くのを経験することになる。

〈読んでいる精神の駆動そのもの〉としての読書に出会う旅に出たいものだ。

（もりかわ としふみ）

## 🌸 私のすすめる 3 冊 (Three books that I recommend) 🌸

ライフデザイン学科・教授 (英語教育学、現代日本仏教、文化人類学)

プッセル 良風 (Prof. Dr. Ryofu Pussel)

### 1. Camosy, C., 2019, 「*Resisting Throwaway Culture. How a Consistent Life Ethic Can Unite a Fractured People*」 New York: New City Press.

This very important book analyses our current social, ethical, and moral situation, which Professor Camosy calls “throwaway culture”, where things and people are thrown away as soon as they are of no value to us anymore. This includes the elderly and vulnerable people, but also all the material things that we desire and dispose of once we are fed up with them. Therefore, what he calls “fractured people” could also be labelled as “the generation of indifference”. It is important that we recognise the dignity in other people, animals, and in nature. I recommend this book because it touches many aspects of our present-day life and culture.

### 2. Harris, E. (ed.), 2021, 「*Buddhism in 5 Minutes*」, Sheffield: Equinox. [Disclaimer: I contributed to this book]

This book is published by the UK Association for Buddhist Studies (UKABS). This speaks for its high quality. In 75 articles - each should take no longer than five minutes to read - Buddhism is explained. Areas covered are: Buddhism as a religion (for example: is it a religion?), the historical Buddha, what the Buddha taught, Buddhist art and culture, Buddhist ethics, and present-day Buddhism. This book is easy to read and covers almost all aspects of Buddhist belief and practice in our contemporary world. I highly recommend it.

### 3. Harvey, P., 2013, 「*An Introduction to Buddhism. Teachings, History and Practices*」 Cambridge: Cambridge University Press. [Disclaimer: I contributed to this book]

Peter Harvey is one of the most regarded European Professors for Buddhist studies, and he is a UKABS committee member. This book is published by Cambridge University, which is a guarantee for its quality. Harvey covers all the important aspect of Buddhism in a thorough, academic manner, such as: the Buddha in this Indian context, early Buddhist doctrines, later history and spread of Buddhism, morals, wisdom, meditation, and Buddhism in the West. I highly recommend this book to anybody interested in the academic study of Buddhism.

(ぷっせる りょうふう)